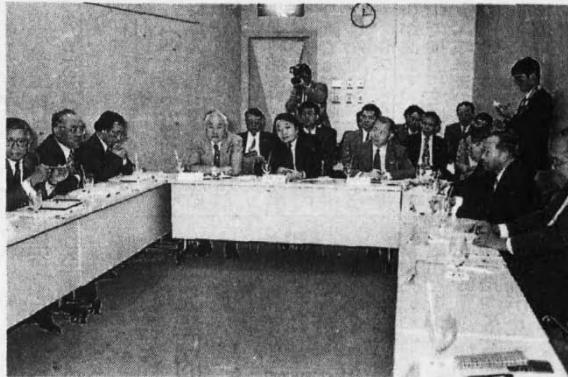


郷土の茶人・古田織部の独創性、現代に生かせ――――――

オリベイズムで産業、文化振興



オリベイズムによる産業、文化の振興策を話し合った懇談会=岐阜市学園町、未来会館

個性的で自由奔放、独創的な文化をつくり出した郷土の武将で衆人の古田織部の創造的な精神「オリベイズム」を、産業、文化振興に役立てる方策を探る「第一回オリベ懇談会」(県主催)が十五日、岐阜市学園町の未来会館で開催され、有識者が活発な意見交換をした。

「デザイン向上」 懇談会 有識者ら提言

本巣郡本巣町出身地との産業界や織部研究者ら十人、美濃焼の岐阜市など四人が出席。初めに県側がとゆかりが深い織部は、安土桃山から江戸時代初期に活躍した。

懇談会には織維、陶磁器、情報発信、拠点開発、産業育成、人材育成を柱に産業、文化振興のたまき台としてつくった「オリベプロジェクト」を説明した。

これを受け、「オリベ二十一世紀社会」を主題に、織部の心は時代の先導的役割を果たしており、町づくりに役立っている。「(つ)イメージーク」を経験を交えて紹介。また、産業界からは川島秀雄県織維協会長が「デザインセンターランド」を造り、オリベイズムを生かして「デザインのレベルアップを図つたらどうか」と提案。沢木長俊岐阜新聞専務は「織部はまだローカルだが、全国的になれば振

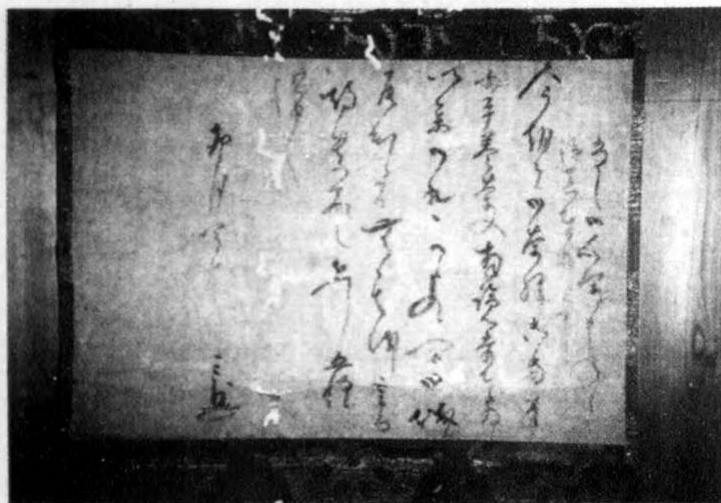
べき」と述べた。

毎年二月二十八日を織部の日に制定している岐阜市の塙本保夫市長は「織部の心は時代の先導的役割を果たしており、町づくりに役立っている。(つ)イメージーク」を経験を交えて紹介。また、産業界からは川島秀雄県織維協会長が「デザインセンターランド」を造り、オリベイズムを生かして「デザインのレベルアップを図つたらどうか」と提案。沢木長俊岐阜新聞専務は「織部はまだローカルだが、全国的になれば振

べき」と述べた。

1995年(平成7年)6月16日 岐阜新聞掲載

茶会のお札申しあげたい



中津川市の間家大正の蔵で見つかった
古田織部の書状

書状には、「尚々 御 拝覧してくださり、ま」という文句が書かれています。この文句は、お目にかかりました時に、お札を申し上げたい」という意味です。

心閑申承候 御忝奉存候
〔己上〕 今朝者御茶極御
惠来 小平棗茶入拝覧添
奉存候 以參御礼可申入
候へ共 御城 龍出候間
無其儀候 重而 期貴
面候 忽々 恐惶 謹言
卯月四日」とあり、
最後に織部の花押が書かれています。

久野さんによると、「今朝は、お客様として、小さい平棗（ひらなつめ）を」とあります。

中津川市新町の「間家大正の蔵」（中津川市指定文化財）で見つかった。織部の書状はこれまでに百通前後が見つかっているが、県内では六通目となる。多治見市坂上町のORIBE研究家久野治さん（七九）が確認した。

県内で6通目

多治見の研究家確認

古田織部の書状発見

中津川市の間家大正の蔵

状が送られたのは、名古屋城築城が始まった慶長十四（一六〇九）年から同十七（一六一二）年の間とみている。

2002年(平成14年)11月19日 岐阜新聞掲載

古田織部

西暦	和暦	年齢	ことがら
一五四四	天文三	〇	美濃国本巣郡山口城主古田重安の弟重定の長男として出生、幼名は左介。
一五六七	永禄一〇	一三	信長岐阜入城、これより一年ほど前には、左介は、信長とよしみを通じていた。
一五六九	永禄一二	一三	信長の命で摂津茨城城主中川清秀の妹せんと結婚。
一五七六	天正四	三三	山城国上久世庄 <small>くぜ</small> で信長の代官をする。
一五七八	天正六	三四	荒木村重の反乱に味方していた清秀の信長方への誘降に成功。
一五七九	天正七	三五	丹波・丹後攻撃の明智光秀を応援する中川軍に従軍。
一五八二	天正一〇	三八	甲州武田攻めで先陣、六月一日本能寺の変後、一三日に山崎合戦で、秀吉方についで戦つ。
一五八三	天正一一	三九	賤ヶ岳で清秀戦死、後継の秀政の後見役。秀吉茶会に秀政を伴い参席。
一五八五	天正一三	四一	七月、織部正に任官、景安を名乗る、山城西岡城主として三万五〇〇〇石程領知。
一五八八	天正一六	四四	重然と改名、利休送別の宴開催、淀川で堺へ下る利休を見送る。
一五九〇	天正一八	四八	秀吉の小田原攻めに従軍。利休との間に「武藏あふみの文」交換。八月利休と熱海入湯。
一五九一	天正一九	五〇	九月帰陣、不破郡 <small>ふのさき</small> 榎戸村・同郡今須妙應寺へ書状発行。
一五九二	文禄元	五六	秀吉に追われ、堺へ舟で下る利休を見送る。
一五九八	慶長三	四九	朝鮮出兵、肥前名護屋に出陣、陣跡有り、秀吉のお伽役(ブレーン)勤務。
一六〇〇	慶長五	四九	八月秀吉没、父重安殉死、隠居して父の遺領三〇〇〇石を継ぐ。
一六〇五	慶長一〇	五〇	家康の命を受け、常陸の佐竹義宣を誘降の使者を勤め、不戦態度をとらせる、自らも後継者に不参戦とする。
慶長一〇	七一	五六	徳川一代将軍秀忠織部茶会に出席。
慶長一九	七〇	五六	秀忠に台子茶湯を伝授、以後將軍家茶道指南役を命じられる。
慶長一八	六九	五六	駿府の家康と面談。
江戸からの帰途家康と面談。	七一	五八	大坂冬の陣、怪我をし、家康から薬が届く。
五月大坂夏の陣、家康から賜死の命を受け死去。	七二	五六	

しも だ うた こ
下田歌子



下田歌子肖像(明治35年頃) 実践女子大学図書館提供

- 恵那郡岩村(現恵那市)出身の女子教育の母
- 明治天皇の皇后付き女官、「歌子」名をもらう
- 華族女学校の学監、教授 ● 欧米女子教育視察時英國女王と謁見
- 帰国後、皇女教育係 ● 学習院女子部長
- 実践女学校創設、校長になり、職業婦人教育
- 帝国婦人協会を設立し、会長をつとめる ● 愛國婦人会長八年
- 郷里岩村の「生誕地記念碑」除幕式に帰郷する

女子も入学したい

一八五四（安政元）年、恵那郡石村藩士平生録藏の長女として出生し、せきと名付けられた。

せきが生まれた平尾家は、代々石村藩校知新館ちしんかんの教授であつた。祖父琴台は、江戸東条家から養子入りした儒者であつたが、藩の派閥争いに巻き込まれ、平尾家を去り、江戸で進歩的学者として、多くの弟子を育て、多くの著書を出して居た。父は、藩の郡奉行や知新館教授を勤めていたが、勤皇運動きんのうに理解を示したことから一度八年間隠居謹慎処分を受け、家禄停止となつた。祖母と母は、糸引きや縫い物などの内職をしたり、家庭菜園で野菜を作つたりして、家計を支えた。

せきは、不幸な境遇であつたが、祖母・母の内職を手伝いながら、祖母から和歌・俳句・漢詩を学んだり、家の蔵書の「源氏物語」「枕草子」「古今集」など古典を読みあつた。一〇歳の頃、次々回りの男子は藩校に入學し、学んでいたので、自分も入学を希望したが、女子はだめであった。彼女は、知新館の窓の外で、中の講義を聞くこともあつた。ある日、館内で漢詩読みを担当された男子が読みよどんでじるとき、窓外からその続

きをすりすりと読む声がした。驚いた教授や塾生が窓外を見ると、歌子がそりこんでいた、ところどころが残っている。せきが、幼少期「女子だって入学したい」という強い願望をいたき、家庭で祖母から学び、また自ら修学し実力を蓄えていたことが、後年わが国の女子教育の先覚者となるに至つた、と聞えよつ。



10歳ころの和歌 実践女子大学図書館提供